

## 創立四十周年にあたり

所長 平野 忠

1月18日の小正月、今年も地元茂浦の青年団が権現舞の奉納に来てくれました。大太鼓に手平鉦の厳かな中にも威勢の良い伴奏に乗って獅子が舞い踊ります。所内所要所を回り邪気を払い安全を祈願してもらいます。当所がここに開設して以来、毎年恒例の行事となっており、うるさいことを言えば政教分離の観点から望ましくないかも知れないと親睦会で対応しており、地元からのご厚意として有り難く受けています。

この「たより」も今回で111号となりましたが、歴代の執筆数ランキングで私がトップだそうで、重ねた年を思わずにはられません。

当研究所の前身である水産増殖センターが当地平内町茂浦に開設されたのが昭和43年4月で、今年4月には創立四十周年を迎えることとなります。この間、ホタテガイを始めとする本県産の魚介類の増養殖に関する技術開発、漁場監視等に、数え切れない成果を挙げてきました。特にホタテガイに関しては、ちょうど養殖の発展期にあたり、全国に例のない「ほたて貝部」を設置して対応してきました。しかし、実はさらに遡ること31年、昭和12年に青森市造道に青森県水産試験陸奥湾分場ができ、それが24年にはむつ市大湊に移設し、27年には陸奥湾水産増殖研究所として独立機関となったので、それらを加えると陸奥湾における増養殖研究は71年の歴史があることとなります。歴代の研究者による4分の3世紀近い地道な研究開発が現在の我々の礎となっています。

その研究の歴史を後世に残すため、40周年記念誌を来年度発刊すべく塩垣研究調整監を中心に現在精力的に編集作業中であり、上記33年間も沿革に加える予定です。先日、歴代の在籍者の皆様に追想の原稿をお願いしましたところ、実に多くの方々から寄せられており感謝に堪えません。

研究開発には何が必要でしょうか。若い時自治研修所で研修を受けた際、教授から研究職員に必要なものは何かという質問があり、恥ずかしながら私は答えられなかったのですが、教授が「それは無から有を生み

出す『創造性』です」と言われたのを聞いて、目から鱗がぼろぼろと音を立てて落ちました。

創造性と並んで重要なことが、現象を分析する能力です。

セレンディピティー (serendipity) は、偶然に求めているわけではない重大な発見をする能力のことで、ペニシリン、X線、ナイロンなどがそれによって発見、発明されました。昭和50年頃、東北区水産研究所の菊池・浮両氏が最初飼育水の殺菌の目的で使った流水式紫外線殺菌器がアワビの産卵率を飛躍的に向上させることを発見したのも同じ能力と言えるでしょう。この技術はアワビ種苗生産の現場に大いに寄与しました。このような現象を何気なく見過ごしてしまわず、そこから成果を見いだすためには、日頃から現場を生き物の眼になって見る必要があります。パソコンの画面からはそれは得られません。

そろそろホタテラーバ調査の季節となりました。4月に入ると作業舎に並べられた万能投影機に研究員や普及員、役場職員、漁業研究会員が一斉に貼り付いて、真剣な眼差しでラーバを探す姿が見られます。私が30年前に作った「ラーバ調査の手引き」と首っ引きで。このように技術の伝承が確実に行われているのを嬉しく感じる反面、歴代の担当者を悩ましてきた熟練を要する手作業などはできればない方がよいので、IT化の進んだ現代なので、コンピューターの画像処理によるラーバの自動計測装置開発などは、工業総研と共同で十分可能ではないかと思うのは贅沢な注文でしょうか。若い研究者に期待するところ大です。

青森県の試験研究機関は平成21年度から独法化するべく作業が進められていますが、どのような形になるにせよ研究開発の精神は不変であり、これからの研究者にはおれないで歩いて行って欲しいものです。

